

学会誌のあり方

特集の趣旨

農業土木学会誌は多くの会員のご投稿に支えられ、毎月皆様のもとに配本しています。農業土木学会では、学会誌の他にも農業土木学会論文集を定期的に刊行し、国際誌「Paddy and Water Environment」の刊行にも携わっていますが、多くの会員にとって本誌は学会との接点を自覚させてくれる存在となっていると思います。

平成2年、本誌はそれまでの編集方針が変更され、小特集形式での編集が開始されました。以降、平成3年からは表紙が公募写真で飾られ、平成10年にはA4版に衣替えをするなどして現在に至っています。

本誌には、小特集報文に代表される、研究成果・施工事例の公表媒体としての機能、講座に代表される学術や技術の解説としての機能、コミュニティサロンがもつ会員間の情報交換の場を提供する機能、学会が関係する行事を告知する機能等がありますが、それぞれの機能への期待度は個々人で異なっていると思われます。

本誌では皆様のご意見をお寄せいただくために、毎号「FAX通信」の欄を設けていますが、学会誌編集委員会では改めて本誌のあり方を広く問うために、「学会誌のあり方」を小特集テーマとして取り上げることにしました。読者である皆様方がお考えになる本誌の果たすべき役割、本誌に望むことなど、さまざまな意見が幅広く集まったと自負しておりますが、これを機に学会誌を身近なものとして読んでいただけることを期待したいと思います。

1. どのような「顔」を描くか？

佐藤 洋平

学会誌の編集は、会員構成の特質および会員のニーズを反映することが望ましい。学会誌の読者は、会員の90%を占めている実務に従事する技術者である。この現実を学会誌の編集に反映させるべきであること、すなわち、実務に従事する会員にとって親しみやすく、わかりやすい編集を心がけること、こうした会員を対象とする講座を充実させることが必要である。また、特集あるいは小特集を中軸に据えた現在の編集方針を踏襲することを前提に、それぞれの支部が毎年1号を編集するシステムを導入すること、さらに、農業土木のビジョンに沿う方向での学会誌名の改称を提案する。

(農士誌72 4, pp 3~4, 2004)



多様な学会員、会員ニーズ、学会誌編集、共同幻想、学会誌名

3. “共感”を呼ぶ学会誌作りを求めて

宮崎 毅

元学会誌編集委員長として、当時の力不足の反省に立ち、学会誌がよりよく発展するために何が必要なかを論じた。特に、共感を得る新しい編集方針を作ること、目からうろこが落ちるような、学会員への情報サービス提供を行うこと、質の高い充実した論文を掲載することの重要性を述べた。

(農士誌72 4, pp 7~8, 2004)



共感、フィールド、小特集、新たな水土の知

2. 学会誌のあり方の点検と編集の活性化へ向け

三野 徹

現在、農業土木はきわめて重要な局面に立っているように思われる。まず、最近の農業土木をめぐる周辺の動きを整理し、学会誌がそのような中で、どのような役割を果たすことができるかについて述べた。学会誌の活性化もそのような動きと無縁ではないと思う。学会名称の検討を契機として新たな農業土木の役割を学会全体で議論すべき時期にきていると思われる。そのための議論の場としての学会誌の役割は、きわめて重要であるように思う。

(農士誌72 4, pp 5~6, 2004)



農業農村整備、公共事業、新しい農業工学、俯瞰的・統合的工学、パブリック・コミュニケーション

4. 学会誌のあり方 会誌企画当事者の立場から

青山 成康

小特集としてこのような企画が成立した経緯を述べ、学会誌の企画編集に携わる立場からの意見を述べた。

会誌の記事は、まず会員に魅力的なものでなければならぬことを念頭におきつつ、最近の会員数減少傾向に少しでも歯止めをかけられるような記事編集を目指す方策について考えた。

報文の性格や閲読方法、ブロック編集のありかた、学会マニフェストの広報と会員の意向反映を、他の土木系学会誌の動向と比較しながら論じた。

(農士誌72 4, pp 9~11, 2004)



学会誌、学会、編集、報文、学会員

5. 事業における課題解決のための情報を

寺尾 雅人

事業計画の樹立・変更に当たっての第三者への説明、事業執行に当たっての環境への配慮が法に盛込まれた。外部にもわかりやすい計画内容とするも、技術の本質を見失わないことが必要である。

また、事業執行の透明性の拡大・効率性の確保では、信頼性設計法への移行でも要求性能の水準決定、実証や検査、保証の方法、施設の保安全管理における残存性能の評価方法が課題である。このような課題を解決するために失敗例を含めたデータの収集・分析の情報を期待する。

(農士誌 72 4, pp .12, 2004)



国営事業, 設計手法, 発注方式, 工事費積算

6. 学会誌に望むこと 地方行政の立場から

小柴 伸夫・奥山 泰河

千葉県土地改良事業担当者に学会誌に関するアンケート調査を行ったところ、学会誌を読む機会がほとんどない事業担当者が大半であり、さらに学会誌は業務の参考にならないと考えられていることが分かった。それは、事業担当者が設計基準を拠り所として業務を行っているので学会誌を読んでも業務に役立たないと感じているためである。学会誌が単なる読み物とならないためにも、業務に役立つような事例や事業の理解を助けるような記事、あるいは具体的な設計手法の解説記事が多くなれば、土地改良事業担当者にとって学会誌は現場での問題解決に役立つものとなるはずである。

(農士誌 72 4, pp .13~14, 2004)



学会誌, アンケート, 土地改良事業, 事業担当者, 設計基準

7. 社会科学への架け橋も視野に入れた新しい学会誌へ

松島 修市

最近の農業土木は、「建造からマネジメントの時代へ」、「ハードからソフト、あるいはニューハードへ」さらに「中央から地方へ」と大きく変化している。このような大きな変化の中で、農業土木は広く社会科学面からの評価にもさらされている。農業土木技術者は、農業土木技術のよいメッセンジャーであるだけでは不十分で、各ステークホルダーの理解者であり調整者たることが求められており、狭い専門分野に閉じこもることは許されない。新しい農業土木の展開の中で各社会科学部門からの議論にも耐えられるように、学会誌には、農業土木との係わりという文脈の中で基礎的な社会科学知識などの紹介、解説は重要だと考えられる。

(農士誌 72 4, pp .15~16, 2004)



農業土木, 学会誌, 民間コンサルタント, マネジメント, 合意形成

8. ゼネコン社員の立場からみた学会誌への期待

園城 典雄

土地改良事業の建設に携わる立場からみた学会誌への要望に関し、まず学会誌の編集方針と意図を“作る側”にもPRすることが必要であること、次に国と地方の事業の方向性、関連技術情報および海外情報等の提供を要望した。さらに編集にあたり、“作る側”の諸事情を説明し編集の参考にさせていただきたい。また私見として、学会誌の役割と意義の重要性に鑑み、より積極策として農の側からわが国および海外に対し発信可能な企画を要望する。

(農士誌 72 4, pp .17~18, 2004)



学会誌, 作る側, 現場管理システム, 情報入手, 新工法
新技術, 新企画の発信

9. ロマンある農業土木のあり方について

高見 浩三

農業農村整備事業は、食料自給率の向上及び多面的機能の発揮を目指した農業の持続的発展を中心に捉え、ストックマネジメントの考えを取り入れた計画的な「農業水利施設の適正な管理と整備・更新」に、その内容が重点化されつつある。こうした流れに沿って、民間各社でも、「維持管理・更新」に目を向けた新技術の開発を進めている。

学会誌としても、革新的な新技術を数多く紹介し、農業土木技術者の技術レベルの向上と新技術に対する理解を高めていくための情報の発信が重要な役割ではないかと考えている。

(農士誌 72 4, pp .19~20, 2004)



農業農村整備事業, スtockマネジメント, 整備・更新, 新技術, 衝撃弾性波, 管路劣化診断システム, 更生技術, 製管工法, 形状記憶塩ビ樹脂

10. 変わらない、でも新しい農業土木のために期待すること

島 武男

学会誌に期待すること、あり方を、農業土木自身、時代、他との関係、の三つの視点から考えてみた。

農業土木は、最も根本的な技術であり、計画 設計 施行 管理を、ひとつのサイクルとした技術であること、日本においては、人々が困らないように食べ物をつくるという命題を解決し、環境というキーワードが使われるようになったこと、管理は農業土木発と思われること、行政官、技術者、学者と多くの人を対象にすることなどを述べた。

農業土木学会誌は、環境、管理といった、まだ一般化、技術化されないことを、行政官、技術者、学者といった多くの人意見が述べ合える、そして技術として向上させていくための自由な場であること、また、残していける、大きな蔵のような存在であることを期待する。

(農士誌 72 4, pp 21~22, 2004)



管理, 環境

11. 羅針盤を持つ総合科学・実学の学会の情報誌への期待

近藤 正

農業土木学会誌のあり方に寄せて、科学・技術の学会の情報誌としての役割への期待を、農業土木のビジョンと照らしつつも著者の私見を述べた。

その中で、地域・多様性を有機的に結ぶネットワーク機能、実践の反省と課題提起の先導役、農業経営基盤方針の矛盾と農業土木の技術的方向の基盤、農業の基盤と農法の基盤、四つの事柄の取組みについて、学会誌への期待を述べた。

(農士誌 72 4, pp 23~24, 2004)



農業土木のビジョン、ネットワーク機能、科学技術の責務、科学者憲章

12. 初級技術者のステップアップのために

千代田 淳

学会誌に取上げてもらいたいことを、初級者のコンサルタントの側から見た点について、次のように希望した。

初級者でもわかる農業土木の基礎知識講座

設計基準についての質問、疑問コーナー

農業農村整備事業の各事業の解説をするコーナー

施工事例の紹介を増やして！

(農士誌 72 4, pp 25~26, 2004)



初級者、基礎知識、設計基準、農業農村整備事業、施工事例

(報 文)

ヴァーチャル・ウォーターの議論の発展性に関する考察

丹治 肇・山岡 和純

1998年にロンドン大学のアラン教授が提唱したヴァーチャル・ウォーター(仮想水)の概念は、中東地域における農産物の輸入の増加が、水をめぐる紛争のリスクを減少する可能性を指摘するものである。筆者らはこの概念の重要性を認めるが、近年、水資源がそれほど希少でない地域にこの概念の適用を拡張する動きがあり、議論に混乱がみられる。そこで、今後混乱なく議論を展開するための用語と概念、並びに指標として使用する方法の整理の考え方を提案する。また、この概念を用いて、地球規模での水資源の効率的・持続的な利用を推進するための国際的な政策協力の方策を提案する。

(農士誌 72 4, pp 33~36, 2004)



仮想水、水資源管理、水生産性、用水転用、農産物貿易、水の希少性

(報 文)

降雨の影響を考慮した地すべり防止計画の事例

国光 正博

地すべり現象は降雨や融雪に伴い発生することが多く、浅い地すべりでは降雨と地すべり現象の相関は強いといわれている。そこで、北海道沼田町の幌新第3地区を事例として、自記観測データを基に間隙水圧を雨量から予測する計算方法を開発し、計算値を観測値と比較したところ、高い相関係数を得た。この方法を用いて確率雨量に対して発生する確率の間隙水圧を予測し、地すべり防止計画を確率的に説明した。また、地すべり移動量と間隙水圧との相関が強い場合には、地すべりが発生する臨界の間隙水圧を数式から推定し、安定解析に利用した。これらの解析結果を利用して、地表面排水工の計画設計や完成後の評価についても具体的方法を提案した。

(農士誌 72 4, pp 37~40, 2004)



確率雨量、間隙水圧、被圧地下水、冠頭部亀裂、地表面排水工

(講 座)

農業土木分野におけるフィールド計測技術(その9)

コンクリート構造物の劣化診断技術

藤原 鉄朗

わが国の農業水利施設のコンクリート構造物の多くは、施工後30年以上が経過しており、経年的に劣化が進行している構造物も少なくない。「コンクリート構造物の劣化診断技術」は、これらの既設農業水利施設のストックマネジメントおよび機能診断のための基礎データを収集する重要な技術といえる。

本講では、農業水利施設の劣化現象を概説するとともに、「塩害」や「凍害」など農業水利施設で発生する劣化現象の計測手法および事例を紹介する。またあわせて、(独)農業工学研究所で、現在開発・検討している長大な農業用水路の効率的な計測技術についても報告を行う。

(農士誌 72 4, pp 49~54, 2004)



ストックマネジメント、機能診断、非破壊調査、劣化、農業水利施設、コンクリート

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外、著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接農業土木学会へご連絡下さい。

〒107 0052 東京都港区赤坂9 6 41 乃木坂ビル

学術著作権協会 (TEL: 03 3475 5618 FAX: 03 3475 5619) E-mail: kammori@msh.biglobe.ne.jp